

古代の瀬戸内海周辺

— 昭. 34. 6. 13, 第45回通常総会にて講演 —

小 倉 豊 文*

1. 緒 言

日本歴史において古代と称するのは、細かい学説とはかくとして、普通に紀元前後から12世紀末葉頃までの、1200~1300年であり、ただ常識的に漠然と古い時代と考えれば、さらにその上に数千年を加えなければならない。

また瀬戸内海といえば、立場によつてその区域の設定に相違があるが、一般的には東は紀淡・鳴門の二海峡、西は下関・豊予の両水道によつて境せられ、東西を近畿と九州、南北を中国と四国の諸地方で囲まれた内海をさし、その総面積1943700（うち島嶼180000、海面1773700）ヘクタールと称せられるが、周辺の瀬戸内海斜面の陸地部を加えると、さらに広大な面積となるわけである。しかも、全海面における大小島嶼の数は江戸時代の地理学者高橋作左衛門景保（1785—1821）の絵図において1000個を数えられるのは「絵そら言」であるとしても、現在の地図上でも合計600個以上は数えられるとのことである。

こうした、狭い日本としては相当広大にして複雑な地形をもつ地域の一千年前の昔を、わづかな時間で紹介することは神ならぬ身にほとんど不可能といわねばならない。そこで本大会の開催地である山陽道一特に広島市を中心として、なるべく時間的系列を追つてトピック的に申し述べることにしたいと思う。

2. 地質時代と原始時代

地質学者によれば、何千万年とか何億万年とかいわれる、はるか昔の日本列島のほとんど全体は、幾度か海面下に没してしまつたり、大陸と地続きになつたりしたということである。従つてある時代には中国山脈が洋々たる海であつて、そこに巨大な鯨が潮を吹いていたこともあり、あるいは瀬戸内海が広漠たる原野であつて、そこに南方系のナウマン象の群が彷徨していた時代もあつたといわれている。

こうした大昔は人間の歴史の始まるはるか以前であつて、私の申し述べる分野ではないが、私どもが関係して最近新しく復元された広島城の天守閣が、いまは広島

郷土博物館になつていて、そこには広島付近で発見された地質時代の大きな鯨や、象の化石が陳列されているので、遠来の客には一見の価値があるであろう。ついでに御紹介申し上げておく次第である。

ところで、ナウマン象が瀬戸内海地方を横行していた時代は、日本列島がアジア大陸と地続きになつていた地質時代の洪積世であり、この洪積世は、ジャワの直立猿人とか中国の北京人類とかいわれる原始人類の出現期と考えられているから、日本列島にも同類の原始人類の化石の発見される可能性があるわけである。瀬戸内海地方においても、かつて明石市西郊の海岸から、それらしい人類の骨格の小部分の化石が発見せられ、一部の学者によつて明石人類と称せられたのであるが、広島付近ではまだそうした原始人類の発見は報告されていない。

いずれにしても、それらは絶滅人類であつて現生人類ではないのであるが、現生人類の日本列島における最初の文化は、新石器時代の縄文式土器によつて代表される縄文時代に現われたものと、従来考えられていた。しかるに太平洋戦争後における考古学研究の進歩は、さらにそれ以前に「プレ縄文」とか「無土器」文化とかいわれる土器を使用しない旧石器時代の文化の存在していたことを、次々に立証しつつある。そして、そうした文化の遺物や遺跡は、岡山県や香川県などの瀬戸内海周辺でも発見されているが、遺憾ながら広島県下にはまだ発見されていない。

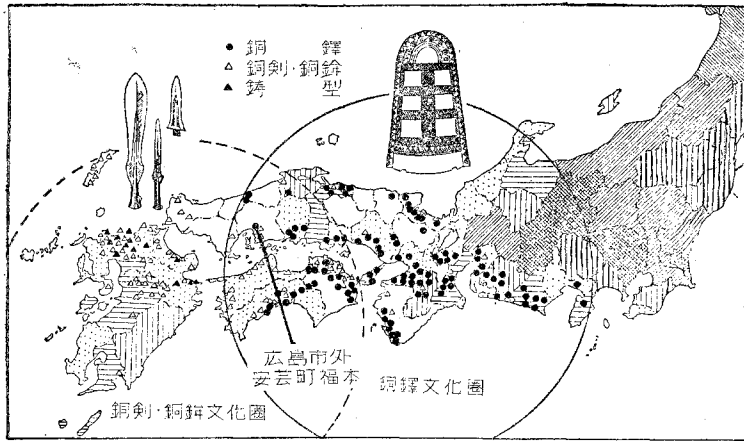
縄文文化の遺物・遺跡は関東地方以北に最も豊富であつて、関西地方には比較的少ないが、瀬戸内海周辺の各地にも点々と発見されている。しかし一般士の興味を引くようなものは、あまりないのである。従つて次の弥生文化時代から、ややくわしく紹介しよう。

3. 弥生文化と古墳文化

弥生文化の遺物・遺跡は縄文文化のそれと反対に、関東地方より関西地方に濃厚に分布している。この文化の時代は大体紀元前2,3世紀から紀元後2,3世紀頃までであるが、この時代は日本列島の歴史において画期的な時代であつた。すなわち日本列島は、この時代から自然採集経済の段階から農耕経済の段階に進み、石器ばかりでなく金属器を使用するようになり、部落国家と呼ばれる原始的な政治社会も出現したのである。

* 広島大学教授、広島文理科大学教授、文学部史学科および大学院勤務、日本文化史専攻

図-1 弥生時代の二つの文化圏



この時代の遺物・遺跡は瀬戸内海周辺到るところに存在するが、古くから学界に著聞しているのは、広島市のすぐ東北に隣接する、安芸町福木のそれであろう。この時代の遺物の一種に、銅剣・銅鉞と称せられる青銅製の武器と、銅鐸と称せられる青銅製の楽器のようなものがあるが、前者は北九州を中心として分布し、後者は近畿地方を中心として分布している。そこで、銅剣・銅鉞を中心とする文化圏と、銅鐸を中心とする文化圏が、東西に対立していたと考えられるのであるが、この両文化圏の境界が広島県あたりであつて、それを最も雄弁に物語るのが安芸町福木の遺物・遺跡なのである。ここからは明治24年に、銅剣・銅鉞と銅鐸が同時に同所から発見された。そして現在もそれらは重要文化財として保存されており、発見地は史跡に指定されているのである。一見の価値は十分あるものであろう。

弥生文化時代につぐ古墳時代は、3世紀頃から6,7世紀頃までであるが、この時代の遺物・遺跡も瀬戸内海周辺にはおびただしく存在する。それらの中心をなすものは古墳そのものであるが、各種の形式の中で歴史的に最も重要なのは、前方後円墳と称する形式の古墳であり、この前方後円墳の分布は、近畿地方の大和・河内などを中心として四方にひろがつており、その分布区域は、現在の天皇の祖先を最高支配者とする、古代国家—大和朝廷—の勢力範囲と考えられるのである。

この前方後円墳の規模最大のものは、瀬戸内海の東辺である大阪府下の河内にある応神天皇の陵と仁徳天皇の

陵であり、その規模の広大なことは、有名なエジプトのピラミッドを、はるかにしのいでいる。しかし、従来は三重の濠をめぐらした仁徳天皇の陵が最大と考えられていたが、戦後実測の結果、周囲の濠は二重であるが、主体である小山のような塚の体積は、応神天皇の陵の方が大きいことが実証された。日本古代における最大の土木工事というべきものであるから、表-1に両陵の実測の数字を対照して示す。

一見明瞭であるごとく、全長だ

けでは仁徳の方が大きい、その他はすべて応神の方が大きく、全体の土量も応神の方は1433960m³なるに對して、仁徳の方は1405866m³と推定されたのである。従つて、かりに1日に1人1m³ずつの土を運ぶとして、1000人就業したとすると、前者は1405日あまり、後者は1434日あまりかかったことになり、いずれも年中無休で工事を続けたとしても、4年弱の日子を要したとせねばならない。当時の大和朝廷の偉力を物語つて、あまりあるものというべきであろう。

瀬戸内海の南北や西方、すなわち中国・四国・九州にも前方後円墳は分布しているが、どこにもこれほど大規模なものはない。しかし岡山県下の造山古墳は全長350mに達するものであり、広島県下最大の三ツ城古墳は全長84mの大きさをもっている。これらはいずれも弥生文化時代の部落国家の国王で、大和朝廷に服属した者の墓と考えられるものなのである。

ところで、大和朝廷—現在の天皇の祖先—が古代日本国家を建てたのはいつ頃であるかは明らかでないが、少なくとも3世紀後半から4世紀の前半頃までに、西日本を統一していたであろうことは、ほぼ確実と考えられる。そして、その後半になると、朝鮮半島に植民地をつくり、やがて、北朝鮮から満洲にかけて大帝國を形成していた高句麗と堂々と對抗し、大体现在の南北朝鮮の境界線である北緯38度線あたりまでも大兵を進めていたのである。従つて、当時の瀬戸内海は、朝鮮出兵の兵士の往來に、にぎわつていたのであろうことが想像せられるで

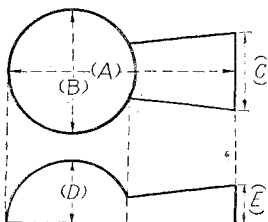


表-1

	(A) 全長	(B) 後円径	(C) 前方幅	(D) 後円高	(E) 前方高
応神	415	267	330	36	35
仁徳	475	245	300	30	27

(単位 : m)

あろう。

こんなことを述べて来ると、古事記や日本書紀に記された神武天皇の東征についての、瀬戸内海の遺跡はどうか、といった疑問を起す人もあるかも知れないと思う。なるほど、古事記・日本書紀には、神武天皇が紀元前 660 余年前に日向国を出発して瀬戸内海に入り、安芸国の埃宮（多祁理宮）や吉備国の高島宮に行宮を作つて数年をすごし、やがて大和を平定して人皇第一代の天皇の位についたと記されている。しかし、神武天皇なる人物の存在そのものがすこぶる疑わしく、紀元前 660 年の天皇の即位、日本の建国も信ぜべからざるものであることは、現在の学界の常識になつているのであるから、その天皇の遺跡について云々するのは、むしろナンセンスといわねばならないのである。ただ、こうした神話伝説の由来については、別に考察せねばならぬ問題が少なからず存するのであるが、今日の主題から離れるので省略しておく。

4. 瀬戸内海と山陽道

さて、古代日本国家が天皇を最高主権者として、完全な統一国家を形成したのは、7 世紀の中葉 645 年にはじまる大化改新以後といわねばならない。しかもこの大改革も中国の唐帝国の制度を模範としたものであつて、この少し前から奈良時代をへて平安時代の初期に至る約 300 年間は、唐の文化の輸入の最も盛んだつた時代である。日本の古代文化はその影響によつて展開したのであるが、この唐文化輸入の大動脈となつたのが、政府から派遣された遣唐使であつた。遣唐使は一行数百人、4 隻の船団を組んで渡海するのが原則であつたので、「四つの船」と称せられ、いまの大阪の浪速の津から船出して瀬戸内海を通り、北九州の北岸に出てから黄海に乗り出したのである。

従つて、瀬戸内海の津々浦々は、遣唐使船に乗つた人々にとつては、いずれもなつかしい所であつたに相違ない。奈良時代にできた日本最古の歌集「万葉集」の中には、これらの人々の作品が数多く収録されていて、おのづからに当時の瀬戸内海航路を物語つているのである。それによると、当時の航路は山陽道ぞいに伸びていたことがわかる。すなわち、大阪を出た船は西の宮・神戸・須磨の沖を通つて明石海峡をすぎ、加古川・姫路・赤穂と播磨灘の海岸伝いに岡山県下に入り、牛窓・玉島・笠岡の沖の神の島と水島灘を経て広島県下の鞆（福山市内）の港に着き、これから長井浦（三原市系崎）・風早（豊田郡安芸津町）を経て広島湾頭の長門島（倉橋島）に泊り、広島湾には入らずに山口県の麻里布・大島・熊毛などの浦々を通り、下関海峡を出ていつたらしいのである。時間がないので各地をうたつた歌の紹介も省略する。心ある方は万葉集を見ていただきたいものである。

ところで安芸国は当時において造船技術の最も発達した国であつたらしい。というのは、日本書紀やそれにつぐ続日本紀などによると、7 世紀のはじめに造船を命ぜられて以来、8 世紀の後葉に至るまで、しばしば政府から遣唐使船の建造を命ぜられているのである。しかも他の国々にはそうした記録がない。残念ながら安芸国のどこに造船所があつたか、その施設はこのようのものであつたか、というようなことは全くわからないが、種々の点から遣唐使船の港であつたいまの倉橋島の本浦あたりが造船の中心地であつたのではないかと想像される。この地は江戸時代にも造船業の盛んな所であつて、現在も当時の古いドックの跡が残つているのである。

次に、山陽道は海上交通の要路であつたばかりでなく、陸路の交通においても特に重要視されていた。これは当時の大陸交通の関門である北九州の太宰府と、首都である奈良や京都との連絡路であつたからである。当時の根本法典である大宝令によれば、今日の国道に 1 級・2 級という区別があるように、全国の官用路は大路・中路・小路と分れており、山陽道だけが大路で東海・東山の両道がが中路、他はすべて小路と規定されていた。しかし各道には原則として 30 里（現在の 5 里）ごとに駅をおき、駅ごとに駅長・駅子などの職員を住ませ、馬・馬具・蓑笠などを常備し、宿泊・給食の施設もあつたのであるから、各駅に相当な建物もあつたらしく、馬は大路 20 匹、中路 10 匹、小路 5 匹を備えるのを原則としていたのである。

唯一の大路である山陽道の駅の建物は立派なものであつたらしく、「瓦葺粉壁」であつたと記録されており、安芸口では駅ごとに 120 人の駅子をおいたとも記されている。これによつても、山陽道の各駅の規模の大体は察せらるであらう。しかし残念ながら、まだ駅の址や道路の施設の名残りといったようなものは発見されていない。これは全国的にそうなのであるが、最近、広島市東郊の安芸郡府中町に、少なくとも平安時代初期のものと思われる古瓦が、相当広範囲に埋蔵されている地点が発見された。しかもその地点は安芸駅の所在地と推定される所であり、出土する瓦は文様から推定して寺院のものとは考えられないのである。現在発掘計画が進められつつあるが、もしこれが安芸の駅址であることが確かめ得られたら、学界への貢献少なからぬものがあるであらう。

なお、ついでながら申しそえるが、当時の道路は一般に今日のように海岸添いにあつたのではなく、内陸の川筋を伝わつていたものようである。土木工学の未発達であつた時代であるから、川の流域を利用せざるを得なかつたのであらう。播磨国から長門国までの間の山陽道には、約 60 の駅がおかれていたのであるが、広島県内だけをややくわしく推定すると、東から来た道筋は、岡

山県の備中の高梁川の支流小田川筋を西にたどつて、小田・後月の二駅をすぎで広島県下に入り、芦田川の支流の高屋川の上流から下流に下り、本流との合流点から芦田川をさかのぼつて備後の府中に入り、そこから支流の御調川をさかのぼつて安芸国に出、沼田川の支流仏通寺川の上流から本流との合流点に下り、大体そこから芦田川本流域をさかのぼつて西条盆地に入り、今度は西流する瀬野川の上流から下流に下り、安芸の府中から峠越しに太田川畔に出てこれを渡り、西から来る支流の安川をさかのぼつて八幡川の上流にとりつき、それを下つて海岸に出てから周防の岩国に向つたと思われるのである。

5. 厳島神社について

最後に日本民族の伝統的信仰であるところの、神社について紹介しよう。瀬戸内海周辺の神社で特に有名な名神大社をあげると、西の方で九州大分県の宇佐八幡、東の方で大阪府下の住吉神社、この二社はいずれも瀬戸内海周辺本土にあるのであるが、海中の島には西の方で広島県の宮島の厳島神社があり、東の方で愛媛県の大三島の大三島神社がある。これらの神社はいずれも千余年前の法令集「延喜式」に、中央政府から幣帛を奉ることに規定されている神社の中の主要なるものであるが、時間の関係もあり、広島市に來られた遠来の客は必ず観光や参詣のスケジュールに組んでいると察するから、以下厳島神社についてだけ、ややくわしく紹介するとしよう。

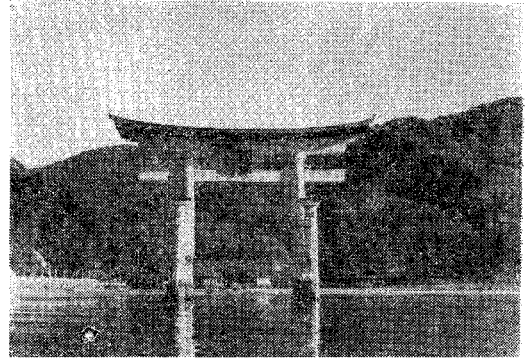
厳島神社は広島市の西方海上の厳島（一名宮島、最近町名は宮島と改称された）に鎮座している神社で、前面に瀬戸内海の碧波をひかえ、背面に弥山原始林の緑樹を負う海岸の水上に、丹柱白壁の殿舎を構築している、人工と自然の美を兼ね備えた絶景をもっている。古来「日本三景」の一つとせられる名勝であることは周知の事実であろう。

この神社は、社伝によれば7世紀のはじめ推古天皇の時代に、この地に鎮座したと称せられているが、確実な文献に現われるのは9世紀の初頭811年、弘仁2年7月17日に「名例兼四時の幣に預る」ことになつたのが最初である。もちろん、はるかそれ以前からここに祭られていたに相違ないが、その原初形態は厳島の島全体一特に神社の背後にそびえる弥山の山が神靈視されて拜まれた、自然崇拜 Naturism の対象であつたのであろう。日本古代の神社信仰におけるこうした形態は、かなり広く行われていたものらしく、現在もそうした形をそのままに残している所も少なくない。近い所では奈良県の桜井に近い三輪の大神神社がそれである。この神社はかつては官幣大社であつたのであるが、現在に至るまで背後の三輪山が御神体とされていて神殿そのものではなく、山麓に拝殿と鳥居があるのみなのである。

厳島神社に社殿のつくられたのが、いつ頃であるかは

明らかでないが、現在のような社殿建築の造営されたのは、12世紀の後半「平家にあらずんば人にあらず」といわれるほどに権勢をほしいままにした、平清盛とその一族の後援によるものと思われる。厳島神社が平清盛と深い関係を結んだのは、種々の伝説はとにかくとして、久安2年(1146)から保元元年(1156)まで十余年の間、清盛が安芸守であつた固縁によるものであろう。清盛はその後、保元・平治の二つの内乱に参加してからトントン拍子に出世し、約10年にして官界最高の極位たる太政大臣に成り上つた。ところが当時の厳島神社の神主に佐伯景弘という人がおり、この人が非常に政治的手腕に富んでいたらしい。そこで彼のそうした天稟と努力によつて、清盛の安芸守であつた「コネ」を生かし、平家一門の厳島信仰をかち得たのであろうと、私は想像するのである。ある学者は当時厳島神社に美人の巫女一厳島では内侍という一がいたためであると考察したり、その他種々の説をなす者もあるが、私には納得しがたい。

写真—1 厳島神社大鳥居と社殿



とにかく平家の厳島信仰は実に異常に熱烈なものであつた。厳島神社はそのために安芸国一の宮として国内第一位となり、神主 佐伯景弘は安芸守という地位も得たらしいのである。日本にはもちろん世界にも類いまれなる海上の宝殿のような社殿のできたのも、そのためなのである。現在の社殿は、その後たびたび火災にかかり、そのたびに復旧したものであるが、大体本社の一廊は室町時代、客人社の一廊は鎌倉時代の再建と考えられている。しかしその建築様式は、優雅な古代平安貴族の生活を彷彿たらしめる藤原時代の風尚を伝えているものと信ぜられるのである。しかも平家の当時には、現在の社殿のほかに平家一門の宿舎である松木御所という社殿や、平家がたびたび同行した天皇や法皇の御所もあつたのであるから、一そう宏壮なものであつたに相違ない。有名な社前海中の朱塗の大鳥居も当時すでに建てられていたのである。また、現在も大願寺とか大聖院とかいう寺が神社の近くにあるが、これらの寺も明治維新の廃仏棄釈までは、いずれも神社付属のものであつた。平家当時も数々の仏教関係の建物のあつたことは明らかである。

建物ばかりでなく、平家一門の参詣そのものも実に大がかりなものであった。第一、現代の急行列車でも7、8時間かかる遠方の京都から、大名行列のような大勢の供をそろえて、瀬戸内海の八重の瀬路を船にゆられて往復するだけでも、大変なことであるとは十分想像されよう。しかも巖島に着いてからの参拝も、われわれのような拍手一つの簡単なものではなく、各種の大規模なきらびやかな宗教的行事を行っていたのである。安元三年(1177)の清盛以下一族こぞつての参拝のときのくわしい記録が残っているので、その際の様子の大体を次に紹介しよう。

このときの滞在は1カ月にもおよんでいるが、この間における最大行事は、千僧供と万灯会というものであった。千僧供というのは、現在もある長い廻廊に、さらに仮設の廊をつくり、美しく着飾った1000人の僧侶を招いて廻廊全体に座らせ、終日終夜引きつづき法華経を誦誦させた上に、その前後にはたびたび舞楽その他の音楽や舞踊を奉納し、さらに神社の周囲を音楽のリズムに合わせて行列行進する行道という大パレードを展開したのであり、万灯会というのは、廻廊にならんだ1000人の僧侶の座のうしろの海中に各1本ずつ1000本、大鳥居の外側の海中に東西の岬の先をつらねて上下二段に数千本、さらに対岸本土の海岸の水打際数里にわたって数万本の、大松火を立てつらねて一時に点火し、終夜不夜城の大スペクタクルを演出したのである。当時の記録は「海底ひとえに火を敷きたるがごとし」とあるが、まことにそのとおりであったであろう。一般観衆は陸にあふれ、そのために集まった船は海面をおおつたとも伝えられている。

さらに、こうした参詣や法要のたびにはもちろん、その他の折々にも、種々さまざまな奉納物があつたのである。それらの物は長い年月の間に散逸したのも多いと思われるが、現在でも、国宝中の国宝として有名な平家一門寄進になると伝える「平家納新」33巻をはじめ、各種の写経、さまざまな調度品類、舞楽の面や楽器類など、当時のままのものが少なからず伝わっており、公開博物館になつている宝蔵に常時陳列されている。舞楽のごときは当時の伝統を伝える舞も楽も、現在もなお行われつつあるのである。いちいち、せめてスライドでなりとも御紹介したいのであるが、今日その用意を致しかねたのは遺憾である。

巖島神社に参詣する人々は相当多いが、かくのごとき



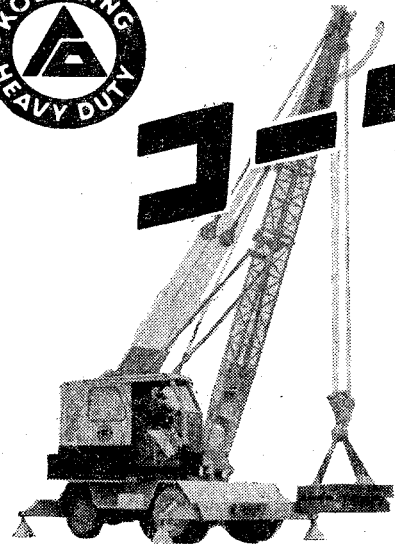
貴重な文化財の陳列されている宝物館を、素通りする方が少なくないらしい。ぜひ御一見を希望しておく。

6. 結 言

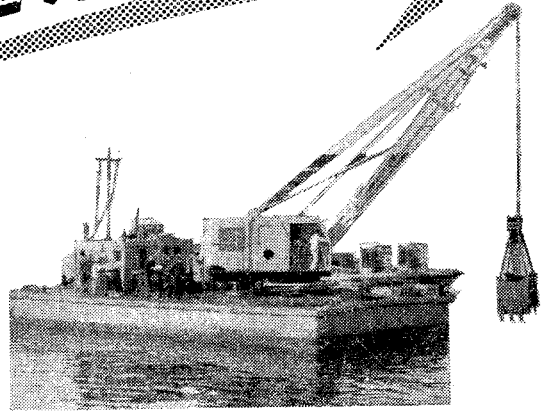
最後に土木工学を専門とせられる方々にぜひお願いしておきたいことがある。巖島神社は以上ごくあらまし紹介しただけでも日本の文化財としてすこぶる重要なものであることは明らかであろう。国家もそれを認めて「特別史跡」と「特別名勝」に指定して保護を加えているのである。しかるに昭和20年9月17日の大暴風雨のときには、社殿の背後を流れる紅葉谷川が山のごとき土砂や岩石を流して、そのために社殿は海中に洗い去られようとした。幸いにその寸前で大過なきを得たのであるが、その復旧には10余年かかり、ようやく最近旧態に復したばかりである。この災害は弥山の地質が非常に崩壊しやすい岩石から成つているところから起つたのだとのことであるが、土木工学の知識と技術を総動員して、この貴重な文化財に再び危険のふりかからぬような、永久的防災計画はできないものであろうか？ これを機会に切にお願いする次第である。



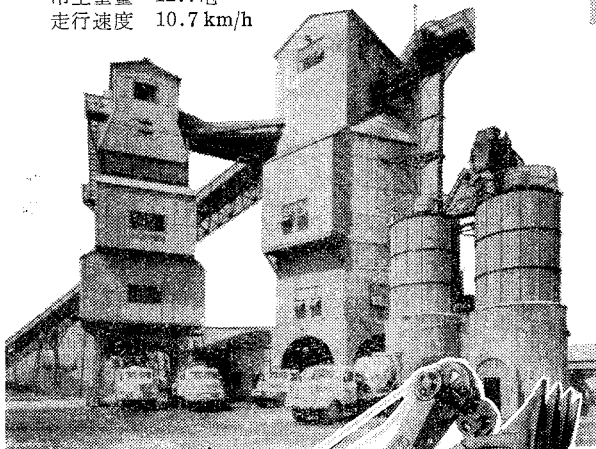
コーリングの 土木建設機械



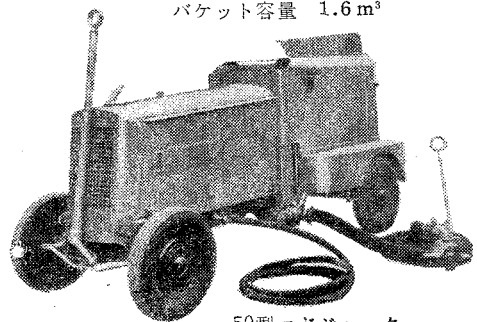
205 型クルーザークレーン
吊上重量 12.7 吨
走行速度 10.7 km/h



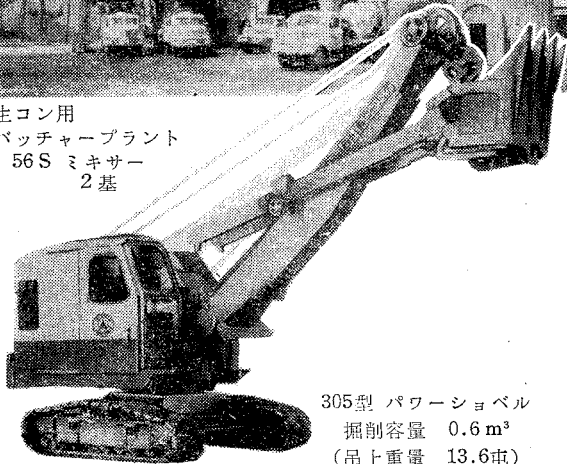
605 型ドレッチャー
バケット容量 1.6 m³



生コン用
パッチャープラント
56S ミキサ
2 基



50 型マドジャック
マドポンプ能力
7.3 m³/h



305 型 パワーショベル
掘削容量 0.6 m³
(吊上重量 13.6 吨)



60 WS 型 ダンブター
積載重量 7.5 吨
廻転 座席型

石川島コーリング株式会社

本社 東京都中央区日本橋通3-2 (広瀬ビル) TEL (27) 5675-7
営業所 大阪・九州・北海道・仙台・名古屋・広島